
短編集

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Zマーク】

Z3303Z

【作者名】

片岡

【あらすじ】

ジャンルも方向性もバラバラなどを無造作に詰め込んでいく予定。モバゲーやってた頃に公開していた作品もあります。

馬鹿だつたり病んでたり意味わからんかつたり。

たまに著作権放棄のお題をお借りして好き勝手やってるかもしれません。

「うるさい（喧嘩）」

阿味です。

“それ”は闇の中で虚空を見つめていた。そうして時たま、通り過ぎる人々を恨みの籠もつた瞳で睨みつけては暗闇で蠢いていた。

父を、殺された。次に母を、そして妹。果てには手に手を取り合つてようやつと共に逃げ延びてきた弟までもが、その凶刃にかかり、尊い命を奪われた。

おれたちがいったい、何をした！

……そう、叫び出したい気持ちだった。が、少しでも目立つような行動を取れば己も殺されてしまう。“それ”はぐっと堪えた。

だが、悔しい。

おれたちがいったい、何をした……？

其処に在るというだけで嫌われ、蔑まれ、命を奪われる。こんなにも不条理なことが、果たしてあって良いのだろうか。

取るのだ。

復讐、してやる。

そう、そうだ。復讐、復讐だ。復讐してやるのだ。家族の、仇を

“それ”は駆けた。疾風の如く素早く駆けた。

「 もやあああああー。」

絹を裂くよつた女の悲鳴。手には、禍々しい凶器。

またアレかーーー。

必死に逃れようとするも、時既に遅し。あの悪夢が、再び襲ひ。徐々に動かなくなる手足。霞む視界。己の情けなさと、涙が出る。此処まで、か。

ああ、父上、母上、年端もいかぬ妹よ。最期まで「己」の身では無く、おれの身を案じた弟よ。仇はとれませんでした。
もうすぐおれも、其方へ逝きます。

「 もやだあー、エーハーの家で『キブリ』がこんなに出るわけ

ーーー？」

かのじょ たいよつ

この夏が終われば、きっと私の命は枯れ果てるのだわ。
張りのあるこの肌はしみだらけになつてしまわくちゃの老婆のよう
になるのだわ。

白漫の美しいこの黄金の髪は抜け落ちていくのだわ。

嫌。嫌よ、そんなの絶対に嫌だわ。

ああ、夏の太陽よ。燐々と私に降り注ぎなさい！
もつと！ もつとよ！
もつともつと光をちょうだい！ もつと私を輝かせて！
そうよ。そうすれば、きっと私は一日でも長く彼の前で美しく咲
き誇ることが出来るのだわ！

ああ、ねえ、愛しい貴方。もつと私を見てちょうだいよ。そうす
れば、もつともつと、私、うんと美しく咲いてみせるわ。
この命を、咲かせてみせるわ。

ねえ、私を見て。

（待つて、私から目を逸らしちゃ嫌！）

（ずっと私を見ていて？）

（そうすれば、太陽なんかよりも優しい光で貴方を包んであげるわ）

学校つぽこ単語で。

学校つぽこ単語で。

学校も詫問せねば

“おまめい”

「おはよつ體問共ー」

「え……、なにお前。殺されでーの?」

「お前、ひよつと金持ちだからって調子のんなよなー……へやつ、羨ましいー!」

「ふはははは! 所詮庶民には到達する!」との出来ない場所にぼく

はこるのだよ! わあ、崇め、称え、いだつ!?

「ふあああつ。……あれ……、おれ、なんか踏んだー……?」

「「グッジコーブ!」」

殺意にみなぎつてゐる奴
村井

羨ましがつてゐる奴
赤城

金持ちな奴
おくのみや

奥乃富

踏んだ奴
ふみだ奴

嵯峨崎

“遅刻”

「セニセー、おせよハハハコモーす」

「はいはい、おやよハハハコモーます。市田、今は風だ。確實に早い時
間じゃない」

「あらりー……。遅刻しました。」めんねーい

「素直でよひしき。で? 遅れた理由は?」

「川で溺れてるお婆さん眺めてたら遅刻しましたー」

「助けるよ。誤魔化すための嘘にしてもそれは酷いだらう。先生は
お前をそんな子に育てた覚えはありません」

「こつちやんもせんせーに育てられた覚えはありますーん」

市田 遅れた奴

田中 担任のせんせー

“迷子”

「あいつ、おっせーなあ……」

「そろそろ行かなきゃいけない時間なんだなぞね……」

「せっかくの修学旅行があいつのせいでお無しになるなんて、誠に遺憾である」

「『立腹だね……、椿さんば』

「すいませーん！ 道に迷いましたー！」

「遅いぞ、内山ー。お前のせいでの椿がキレイで先生はガクブルだった。
罰として其処にある噴水の周りを五十周」

「ええ！？ なんなんだその体育会系のノリ！」

「お前が迷つたのは道ではない。人生である」

「相変わらず椿は俺に酷い！」

困つてた奴
樋田

椿
キレイた奴

迷つてた奴
内山

「はい、じゃあ、」の問題を嵯峨崎一、解けー

「せんせー、嵯峨崎は今ぐつすりおねんねタイムでーす」

「よーし、市田一、叩き起こせー」

「いやでーす。いっちゃんの手が腫れちゃうでしよう

「嵯峨崎つてそんな石頭だつたっけか？」

「嵯峨崎、起きあい。先生はお前のせいで酷く困つておられる

「ううん……、おれ、なんだかとても眠いんだパトラッシュ」

「誰がパトラッシュか。殺されたいのか貴様」

「ぬあつ？」

「だいたい眠いとか嵯峨崎寝て……、うわあ……、やいませるつ
？」

「椿一、お前のその心遣い、先生はとっても嬉しい。でもな、先生、
蹴り起こせとは言つてない。脳天に踵落としするなんて嵯峨崎を殺
す気か。椿はもうひよつと既に優しくしてやうつなー

「酷く足が痛む。何故だ」

「嵯峨崎の頭は椿の踵落としに打ち勝つたのか

「誰かおれに消しゴム投げただろう。おれの眠りを妨げる者は何人たりとも赦さない」

「嵯峨崎お前頭可笑しいんじやないのか

嵯峨崎の頭は椿の踵落としの威力をものともしない。

人物紹介とか載せてたけど嵯峨崎と椿だけ覚えとけば問題ないと思つ。

“授業妨害”

「えー、じゃあ、この式に当て嵌まる公式はなんでしょう。はい、
嵯峨崎

「先生、嵯峨崎また寝てるぜ」

「よーし、村井、叩き起しぜ

「無理だつて。先生、こいつと何かの病気なんだ」

「仕方ない。じゃあ、秋澤、わかるか」

「先生！ 秋澤は手鏡に映る自分に夢中ですー。」

「よーし、内山。その手鏡叩き割つてくれ」

「俺じや無理だ！ 嶋峨崎の頭に任せましょー。えいっ」

「ほ、本当に割れた……。嶋峨崎くん、大丈夫かな……」

「微動だにしねーな」

「こいつ、実は寝てるんじゃないで死んでるんじゃないのか」

「あああああーー なんてことすんだよ内山ーー。」

「だつて先生が叩き割れつて」

「嵯峨崎もだが、秋澤、お前はいつたい何のために学校来てんだ？」

「勿論美しいオレを愛るために決まってんじゃないスかー。勉学に励むオレヤバくね？ マジばねえ」

「……は、励んでないと思つ……。つあ、『』『』めんなさこつ……」

「秋澤、お前帰れ」

心配してた奴

鳥越

ナルシード奴

秋澤

“抜き打ち”

「この間やつた抜き打ちテストのことだけどな、正直、ほんつと最悪だった」

「いきなり抜き打ちとかやるせんせーが最悪だと思ったー」

「市田、お前廊下に立つか？」

「冗談でーす」

「で、話を戻すが……、なんだ平均点30点つて。舐めてんのか

「先生ぺろぺろしたつて不味いだけだろ?」

「内山、お前そろそろ本気でどうぞ」

「私は先生ならぺりぺりできる」

「椿、正気に戻れ。それでもた話を戻すが、このクラスでまともな点を取れたのは鳥越と椿と真崎、この三人しかいない」

「へー、真崎もか。すげーな」

「えつ？ 滅茶苦茶簡単だつたよ。ねえ、鳥越さん」

「えつ……、う、うん。簡単だつた」

「あの程度で難問とは笑わせる」

「お前らちよつと殴りさせて」

「というか、大体可笑しいだろ。なんでテストを開始した直後に過半数の奴が机に伏せるんだよ。少しは努力しろ。嵯峨崎に至っては名前すら書いていない。真っ白な回答用紙が手元に届いたときは先生、目が飛び出るかと思った」

「な、名前書いてないのに、わかつたんですか……？」

「名前を書く欄に、“眠い”って書いてあつた。記入してあつたのはそこだけだつた」

秀才 そうな奴
真崎 まさき

“居眠り 2”

「 で、この公式を此処に当て嵌めて……、」

「 $x = 2$ 、 $y = 4$ 。これを代入すると……、」

「 といふことだ。つまり……、」

「 であるからして、このよつて証明出来るわけだな。」

えー……、

「 ……そろそろお前、起れやう」

クラス全員でハイパーおねんねタイム

“授業妨害 2”

「少しよろしいですか、田中先生」

「鬼頭先生、よろしいですけどいつたい何処から入ってきてんだア
ンタ」

「え？ やだなあ、窓からに決まってるでしょう？ 見てたじやないですか」

「そんな爽やかな笑顔で言われても、此処が何階だかご存知ですか
？」

「四階ですよ？」

「ですよねー」

「そんなことより前の時間でこの教室に教材を置き忘れてしまって……、あ、あつたあつた。早く理科室に戻らなくつちや」

「どうして鬼頭せんせー一階にある理科室からわざわざ校舎の壁を塗つてこの教室に来たんだうつねー」

「ちょっとしたチャレンジです」

「今すぐ捨てる。その無駄なチャレンジ精神を」

チャレンジヤーなせんせー
鬼頭きとう

“図書室”

「あ、あのつ……、赤城くん、図書室は飲食禁止で……」

「えー、別に良いじやんか鳥越ー。腹減つたんだもん。仕方ないだろー」

「で、でも……、」

「あ、やべつ。」一矢溢した

「ええええええええ！？」

「図書室は飲食禁止だつてんだろ？が！！ その汚れた本を修復するのにいつたいどれくらいの時間がかかると思ってやがる…！」

「一日だ……！」

「た、たつた一日じやんか！」

「その一冊でどれくらいの本が整理出来るんだろうなあ！？」

卷之三

誠心誠意下座しゆー！ 二回まわりでワンと詰ええええええ！

! ! !

「あれ、椿、鳥越に姉か妹なんていたつけか？」

「いや、あれは鳥越です」

「鳥越は一重人格なのか」

いつも内気な鳥越さんは本当に命かけてる

“説教”

「いや～、相変わらず田中先生の請け持つ椿と鳥越と真崎の三人は
とても優秀な生徒ですなあ」

「はは、有難う御座います」

「これも偏に田中先生の教育の賜物でしょうなー」

「いえいえ、そんなことは……、」

「ですが……、その他の生徒の成績が少し……」

「…………」

「三ヶ月待ちまじゅう。その間に彼らの成績を上がることができなければ、クビも覚悟して下さーいね」

「マジでか……」

果たして校長に教員をクビに出来る権限があるのか。

信じる者は巣食われる

「ああ、可哀想に」

そう呟くと、声は届いてしまつていたらしい。彼女は恐る恐る俺を見上げた。

大きな大きな飴色の瞳。極上の蜂蜜みたいな、日本人にはあまり見ない綺麗な綺麗な髪。嗚咽を漏らす度に震える肩を慰めるように撫でるそれは美しい。

「だ、れ……」

「さあ、誰でしょう。誰であつてほしい?」

「……」

はくはくと何かを言いたげに口を動かし、そして閉ざしてしまつた。とりあえず何も言わず、待つてみる。

こんな人気の無い冷たい廊下に一人座り込んでいるのは、桐山京。数ヶ月前までこの学園のアイドルだった女の子だ。

珍しい時期に転入してきた彼女は、学園の中でも人気のある男子生徒から溺愛されていた。しかし、それでも女子たちからの嫉妬を買つことはなく、誰からも愛された女だつた。

……そう、数か月前までは。

今はもう、誰にも見向きもされない可哀想な女の子だ。

桐山の人気が落ち始める数か月前、“彼女”はやってきた。望月 もちづき

有沙。桐山に負けず劣らずのとびっきりの美人だ。

桐山のふわふわな髪とは違つて、黒髪の真っ直ぐなロングストレート。目は赤。何処か冷たい印象を抱かせる、和風美女。彼女の手によつて、桐山は陥れられた。

俺はよく知らないが、桐山は裏では結構あくびこことをやつていたんだとか。

人気のある男子たちを身体で誘惑した。嫉妬で虐められないように男子たちの私物を女子たちに流していた。事実、男子たちの私物は度々無くなることがあつたらしい。

あれよあれよという間に桐山の味方はいなくなり、今では皆が望月の配下にある。望月宗教でも作りそうな勢いだ。

と、まあ、話を戻して。

彼女　　桐山がこんなところにいる理由は簡単だ。誰かに見つからない為。虐められない為。

が、その努力も空しく、結局見つかってしまつたらしく、制服はぼろぼろになつてゐる。

「誰で、あつてほしい？」

もう一度訊ねた。

すると、彼女は小さく、けれどはつときりとした声で言つた。

「わたしの、敵じゃ、ない人」
「そう、じゃあ、味方になつてやるつか」
「……ほんとう?」

期待の眼差しが突き刺さる。

さあ、俺は本当かどうかも何も言わない。好きに思へなさい。さ
あ、俺はどっちだらうね。
敵と判断しても良いけれど、お前にそれほどの余裕は無いだらう
よ。

甘く微笑んで抱き締めてやれば、すぐに背に細い手が回つた。

信じる者は巣食われる（後書き）

逆ハーツて御存知ですか？逆ハーレムの略称で、まあハーレムの逆ですよ。

逆ハーレムって御存知ですか？まあ、男共の好意を無理矢理その補正のかかっている女の子に向けるものですよ。勿論、あんまり良いものじゃありません。大抵は途中で解けてその補正のかかっていた女の子は嫌われます。

傍観ものではもう王道ですね。傍観つていう非王道の中の王道。

で、逆ハーレムあるんなら、傍観補正があつたって良いんでね？って話。

もしかしたら続きを書くかもしれないけど、現時点ではそんな気力は全く起きないので一話完結に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3303z/>

短編集

2011年12月27日23時47分発行